

留学・研究計画書

氏名 金子奈央	留学機関名 マレーシア国民大学
留学先国名 マレーシア	留学期間 西暦 2006 年 10 月 ~ 2007 年 9 月
研究テーマ マレーシアにおける「市民性教育」科目の導入と、多文化的市民性に関する研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>市民性教育は、多民族、多文化国家における多様性の尊重と国民統合の両立について取り組む重要な手段である。市民性教育は、お互いの文化を理解し、尊重し合うことを学ぶ多文化教育の側面を持ち合わせていると同時に、「市民性」という概念を通じた国民間の統一意識についても学習し、両者のバランスを考えるものとなっている。</p> <p>現在の市民性教育がその課題に取り組む際に、西洋先進諸国を中心に発展してきた経緯から、近代西洋的価値観の影響を多分に受けた世俗的なものであるという問題が指摘される。また、この世俗性は、西洋キリスト教諸国の文化的背景の中で形成されてきたものである。これを非西洋諸国やイスラーム諸国が導入すると、「市民性」「市民性教育」に対する理念の相違から効果的な教育でなくなる懸念がある。以上のことから、現在の市民性教育には、①各国の持つ文化的、社会的コンテクストに基づいた市民性教育の応用、デザイン ②非西洋的価値観に基づいた市民性教育のモデルの提示 という二点の課題があると考ええる。</p> <p>マレーシアの公教育（初等・中等教育）で2005年度より導入、必修化された「市民性教育」の実態（導入の経緯、実施展開）を研究することは、上述した課題に対し重要な示唆を与えると考える。マレーシアは、複雑な民族構成の多民族、多文化国家である。国内は、マレー、華人、インド系という三大民族と、先住民族で構成され、共通性が少なく独自性の強い各文化が拮抗し混在している状況である。また、マジョリティであるマレー系の大多数はイスラームを信仰しており、2001年9月には、マハティール前首相によって「イスラーム国家宣言」がなされるなど、イスラーム色の強い国家でもある。イスラームも一枚岩ではなく、イスラーム性、世俗性との共生を巡り、穏健なイスラーム化を目指す与党 UMNO（統一マレー国民組織）と原理主義的な野党の PAS（汎マレーシア・イスラーム党）の間でクランタン州を中心に激しい論争が繰り広げられており、イスラーム内部にも複雑な多様性が見られる。</p> <p>そこで、非西洋、イスラームという国家の枠の中で、多様な文化が混在するマレーシアの、「市民性」概念及び「市民性教育」の実態を明らかにすることを本研究の目的とする。本研究により、マレーシアという国特有の「市民性教育」を明らかにすることは①の課題に対する重要な示唆となる。また、非西洋的価値観の代表例であるイスラームの「市民性」および「市民性教育」という視点からの分析も行うことで、②の課題に対してひとつのモデルを提示することができると考える。</p> <p>本研究は、西洋先進諸国発の市民性教育に対して、新たな市民性教育のバリエーションを提示するという点で、学術的意義があると考ええる。また、他の非西洋及びイスラーム諸国への適用可能性を示すことで、社会的意義についても示すことができる。</p>	

成果報告書

記入日 2007年 10月 30日

氏名 金子奈央	留学先国名 マレーシア	所属機関 マレーシア国民大学
研究テーマ：マレーシアにおける「市民性教育」科目導入と多文化的市民性に関する研究		
留学期間：2006年 10月～2007年 9月		
<p>1年間のマレーシアでの留学生生活を終え、9月末に帰国致しました。留学を経験された方が皆さん口を揃えて言われていたとおり、本当に1年間はあるという間でした。はじめに、今回の留学に際しまして、様々な面でご支援頂きました松下国際財団の皆様には心より感謝申し上げます。</p> <p>【留学全般について】</p> <p>留学中は、大きな怪我も病気もほとんどなく1年間を過ごすことができた。ただ、今年7月にマレーシア北部のクランタン州にいった際に宿泊先でシラミをもらってしまい、幸い髪には被害はなかったが、まつげにシラミがうつり吸血されてしまうということがあった。原因が分からない激痛が続き治る気配がなく、また出血までしてきたため眼科に行ったのだが、原因がシラミだと分かった時は大変衝撃的で、その後にやらなくてはならないことの多さ、一時控えなくてはならず不便を感じることの多さを考えて非常にストレスを感じた。海外で病院にかかるということがどれほど骨の折れることかということを実感し、また不安も大きく、心身ともに安定した留学生活を送るためには、しっかりと自分の健康や周辺に細心の注意を払う必要性を感じた。</p> <p>マレーシアでの留学生活での一番の収穫は、本を読むだけでは理解することができなかつただろうマレーシア現地の独特の雰囲気を読むことが少しできるようになったこと、だと思う。その場にいなければ、そこで生活していなければ分からなかつただろう多くの貴重な経験をすることができた。言葉にするのは非常に難しいが、主には、人との約束の仕方、ものの頼み方、時間の使い方、スケジュールを調整する際の時間の考え方などである。民族間の乖離は目に見てとれるほど明白なものであり、主にマレーコミュニティとの交流が多かつた私は、華人やインド系との交流の機会を持つことが非常に難かつた。意識するようになってからは、マレー人以外の友人もでき様々な民族の人達の抱えるマレーシアへの思いを聞くことができ、マレーシアをより深く理解でいるようになったと思う。マレーシアの多民族社会の複雑性を一番実感したのは、話をする相手の言語に対する思いを汲み取りながらどちらの言語を使用するか決定しなくてはならない時だつた。マレー語を使いたがらない華人やインド系の人からその人の思いをなるべく詳細に聞きたい場合は英語を必ず使わなくてはならなかつたが、一方でマレー語教育にどっぷり漬かつてきた学校教員と話をする際はマレー語を使用しなくてはならなかつた。その都度状況を見極め頭の中で言語スイッチを切り替えるのが非常に難かつた。今回の留学では多くの学校や教育省などの教育関係者、研究者の先生、大学職員、学生との交流を通して現地ネットワークを築くことができた。現地でお世話になつた肩には、過去に日本人に親切にしてもらつたことに大変感激した経験を持つ人が多かつた。親切にしてもらつた経験が次の親切を生み、そして私もその親切の輪に大変お世話になつた。深く感謝すると共に、この輪をつなぐ役割を今後果たして行きたいと思っている。</p>		

【研究報告】

① マレーシア国民大学およびマラヤ大学大学院生対象の授業への参加

2007年1月から5月までのセメスターにおいて、マレーシア国民大学（以下、UKM）の教育学部の大学院生の必修講義である *Isu-isu pendidikan di Malaysia* (Educational problems in Malaysia) を受講した。また、同セメスターにマラヤ大学（UM）において、教育学部の大学院課程の講義である *Educational research method* の受講許可を頂き、参加させて頂いた。UKMの教育学部の大学院は、現職の教育関係者（教員、教育省や州教育局職員など）が大半を占めており、彼らの中で現在のマレーシアの教育問題について学び、意見を共有しあえたことはとても貴重な経験となった。講義を通して、現在のマレーシアの教育現場において一番の関心トピックは初等教育および中等教育で行われている「英語による理系科目教育」もしくは「コンピューターを使った教育」そして英語を駆使できる人材を育成するための「英語教育」などの実利的な教育であることを実感した。マレーシアの教育現場でもグローバリゼーションは重要な課題であり、グローバリゼーションに対応し、マレーシアの経済成長の担い手になる人材を育成することが、マレーシアの教育政策の重要課題となっていることが背景にある。現職教育関係者であるUKMの大学院生たちの大半が「英語」「ICT」「理数科目」といった実利的な教育についての研究を行っていることから、マレーシアの教育の重点がどこに置かれているかは明白であった。

UMの授業では、John W. Creswellの *Educational Research: Planning, Conducting and Evaluating Quantitative and Qualitative Research* を読み進め、それぞれ章ごとに担当者を決めて発表をしていった。私は、第17章を担当し、Qualitative methodとQuantitative methodをひとつの研究で混合して利用するMixed Method Designについて発表した。この授業を通して、マレーシアの教育研究では調査メソッドとしてQuantitative methodを用いる人がQualitative methodを用いる人と比して非常に多いことを知った。授業自体もQuantitative methodに比重が置かれており、受講生の関心も高かった。二つの授業を通して、マレーシアの教育研究のトレンドは、量的調査方法を使い、英語、数学、理科、ICT関係の実利的な教科に対する教育政策や教育実践の成果を研究するところにあると感じた。実際に、何度か参加した教育関係の研究大会では、そのような発表が大半を占めていた。

② 関連研究大会や研究会への参加

2006年10月から2007年9月までの留学期間中様々な研究大会、ワークショップがマレーシアで開催され、参加する機会に恵まれた。中でも、3月20日にUKMのATMA(マレー世界研究所)で京都大学東南アジア研究所およびアジア・アフリカ地域研究研究科、東洋大学アジア文化研究所との共催で行われた国際ワークショップ“*Experiencing Development at the Margins in Malaysia: Views from Minorities, Peripheries and Women*”、では“*Citizenship Education in Malaysia: Today’s position of value education for national unity*”という題目で発表をさせて頂いた。初めての国際ワークショップでの発表だったのもあり、大変稚拙な発表となってしまったが、出席されていた研究者の先生方から今後の調査や修士論文執筆に際し大変参考となる貴重なご意見を頂いた。その中でも大変興味深かったのは、「マレーシアの公教育で行われる市民性教育および市民性概念は、中央政府からの押し付けであり、プロパガンダである。国家戦略に都合のよい市民性教育をしているに過ぎない。本来の市民性教育は、市民が社会のために自分で選択し、行動することのできるようになるための能力や知識を教えるものであり、下からの湧き上がる行動を促進するためのものだ（自発的な市民を育成するためのもの）。しかし、マレーシアは、マレーシア政府にとって理想とする上からの市民性でしかない。それを果たして本当の意味での‘市民性教育’としていいのか」というご指摘だった。マレーシアは複雑な複合民族社会であり、多種多様な民族を国民として統合していくことは国家の長年の命題である。教育政策は多民族間での国民統合の達成に向けての重要な手段であると考えられていることもあり、中央集権の色が強い。1957年の独立以降、中央のコントロー

ルの行き届いたカリキュラムと教科書によって社会科や道德教育などを通して市民性教育は行われてきた。ご指摘を頂いたのは、マレーシアの中ではエスニックマイノリティであるインド系の先生だったのだが、これまで行われてきた他教科での市民性教育に対してエスニックマイノリティである人達がこのような意見を持っているということから、公教育の中で今まで行われてきた市民性教育に対して各民族の文化や習慣、社会的立場などが考慮されておらず一方的に上から押し付けられているものだという不満があったということが明らかになった。

③ 現地調査

修士論文の研究計画及び松下アジアスカラシップに提出した研究計画書に沿って、2005年からマレーシアの初等教育及び中等教育で必修科目として導入された「公民と市民性の教育 (Pendidikan Sivik dan Kewarganegaraan)」についての調査を行った。研究目的は、マレーシアで行われている「市民性教育」として、「公民と市民性の教育」を位置づけ、その実態を明らかにすることで、マレーシアの市民性教育の特徴および独自性を明らかにすることおよび、「公民と市民性の教育」を通して、マレーシアの国民統合教育の現状を明らかにすることであった。調査の際、「教育政策側」と「教育現場側」と大きく二つにカテゴリー分けをして調査を行った。

I 政策側に対する調査

政策側として、Dewan Bahasa dan Pustaka から出版された「公民と市民性の教育」の教科書（マレー語版）作成担当者であった UM 常勤講師の Vishalanche Balakrishnan 氏と 2006 年 12 月 8 日に、教育省カリキュラム開発センター「公民と市民性の教育」カリキュラム担当官の Tengku Adnan 氏と 2006 年 12 月 21 日にそれぞれお会いし、インタビューを行った。本教科導入に携わった政策側の方に聞いたかったことは、研究対象である「公民と市民性の教育 (Pendidikan Sivik dan Kewarganegaraan)」のカリキュラムや、教科書が策定されるまでのプロセス（導入背景など）や政策側から見る本教科の特徴やセールスポイントについてであった。誰が、いつ、この教科の導入を決めたのか、どのような人達が策定に関わったのか、カリキュラム策定時に政府からどのような指示があったのか、作成中にどのような点で政府から改善を求められたか、本教科の特徴はどこにあるか、近接科目との棲み分けを策定段階ではどのように考えていたのか、などであった。両氏が共通してインタビューの際主張していた点は、本教科は、全民族共通の価値教育であるということと、本教科はマレーシアを構成する全ての民族の文化や習慣を考慮、カバーしているという二点である。本教科導入以前は、ムスリムはイスラーム教育の中で、非ムスリムは道德教育でそれぞれ価値教育は行われており、全民族共通の価値教育の導入は長年の課題であり、またマハティール（当時）首相の長年の夢でもあったという。近年のマレーシアの社会状況から、一層全民族共通の価値教育の導入は必要視されるようになったため、本教科が 2005 年から導入されるのが 2001 年に発行された「第三次長期計画 2001-2010」で言及され、2003 年に正式に導入が発表された。これまでのマレーシアの多民族社会の文化および習慣の理解についての教育内容は、三大民族であるマレー、華人、インド系の範囲に留まりがちだった。しかしながら、本教科はイバン、カダザンとサバ、サラワク州の先住民族まで考慮した民族バランスで構成されており、そこがひとつの大きな特徴となっているとのことだった。導入の際、政府からは「全民族バランスの取れた内容にすることが最も重要である」との指示があり、本教科のカリキュラムや教科書の策定の際、掲載内容、挿絵に至るまで民族のバランスを取ることが最重要事項となっていた。カリキュラムの策定段階においては、三段階の策定会議が行われた。第一段階の策定会議では、マレーシアに存在する様々な宗教団体の代表者を招集し、各宗教団体からの意見を伺う共に、各宗教についての一般的な知識（各宗教の持つ文化習慣について）についての情報収集も行っている。このことから、本教科策定に際して、政策側が様々な

民族文化、習慣を考慮しようとしたことが伺える。このように政策担当者から本教科導入に際する話しを聞いた限りでは、マレーシアを構成する主要な民族の文化、習慣などを十分考慮しながら策定されている。一方で、本教科以前の市民性教育についてマイノリティの視点からは、マレーシアの教育内容はマレーの視点中心で書かれており、そこから何か伝えたい教育的メッセージがあるとしたらそれは中央政府のプロパガンダに過ぎないと考えられている。本教科の内容をマイノリティがどのように受け取っているのか、本教科に対しても以前の市民性教育同様の印象を受けるのであれば、政策側が意図していることと、それを受容するマイノリティの間に大きなねじれが存在することになる。本教科は今までの市民性教育の大きな問題を改善したものであるのか、それともこれまでと同様に政策側と授業する側に大きな隔たりがあるのか、政策側へのインタビューを通して、その後実施する予定であった学校調査（教育現場側）において注目すべきトピックがひとつ増えることになった。

II 教育現場側に対する調査

2007年1月から9月にかけて、セランゴールおよびペラ州において初等学校（小学校）での調査を行った。マレーシアには、マレー語を教授言語とする国民学校 (Sekolah Kebangsaan) と中国語（北京標準語）とタミル語を教授言語とする国民型学校 (Sekolah Jenis Kebangsaan) の三種類の初等学校が存在する。今回は、各種学校二校ずつ計六校で調査を行った。当初の予定では、地域の多様性を見る目的で他の地域でも調査をする予定だったが、予備調査と教育省の発行する報告書等を参考にしたところマレーシアにおける初等教育の中央集権は明白であり、各地域で差異を生み出せるシステムがないため、「マレーシアの市民性教育の実態を明らかにする」という研究目的に沿って、首都であるクアラルンプール近郊のセランゴール州およびペラ州において三種類の初等学校調査を行った。学校では、「公民と市民性の教育」の授業観察と、担当教員へのインタビューおよび質問紙調査を実施した。調査を通して、三種類の学校において行われる授業運営に大きな差異はなく、中央のコントロールの強さを実感した。授業は基本的に教科書・ノート・エクササイズブックと黒板を基本にした授業であり、教科書の内容確認（音読、先生の説明）→ 内容確認のための問答 → エクササイズブックでの演習作業というパターンが多かった。単元によっては寸劇や、ポスター作成などのグループワークを行い、年に数回スクラップブックを作成していた。スクラップブックのテーマは、自己紹介、家族紹介、マレーシアの観光地について、歴代首相やスルタンについて、マレーシアの災害についてであった。本教科は、まず自分について学び、その後は家族、学校、社会、国家、グローバルと学習する単位が同心円的に広がる構成になっているが、その中でもナショナルのレベルの学習に一番力を入れており、愛国心の育成が現場でも最重要視されていた。2007年は独立50周年のため、独立記念日に関する指導を強化するよう教育省から指導が来ており、6月から8月にかけて「独立記念日」関係の内容を特に力を入れていた。毎回どのような単元においても独立何周年かなどについて教員から説明があり、愛国心を育てる歌が積極的に歌われていた。各民族理解の学習については担当教員も認識しているが、自分たちの民族の文化にやや偏りがちで、三大民族の範囲で終わりやすい。教育省から、他の民族の文化について情報提供や指導する際の注意事項などを担当教員に指導することは特になく、担当教員も事前準備をせずに自分の経験に基づいて知っている範囲で授業をしていることが原因であると考えられる。担当教員に関しては政策側と本教科に対する目標（多民族社会の尊重・愛国心の涵養）は共有されているが、本教科のキーワードである「マレーシアの市民性」や「マレーシア市民」といった曖昧な概念を具体化するまでには至っておらず、また教育省側でも行われていない。多様な民族の文化習慣が混在しイスラームや西欧文化、東洋文化などの交差する現地において、民族のバランスを保ちながら「マレーシアの市民性」を明確に提示することは非常に難しい問題である。各民族の立場を考慮しながらも共有できる「マレーシアの市民性」を模索していくことが、現在の最重要課題であるというのが、市民性教育の専門家の認識である。